

夢のテンプレ
幼女転生、
はじめました。②

憧れののんびり冒険者生活を送ります

uino
ういの ill. 蒼

???

チナがウミカ町で
出会った美女。幼い娘を
連れてきている。

**ホムラ
(元の姿)**

火の精霊王に仕える
フェニックス。
自由奔放。

ホムラ(小さい姿)

シエル

水の精霊王に
仕えるフェニリス。
面倒くさがり。

コタロー

風の神獣・白虎の
子供。やんちゃ
でわんぱく。

チナ

本作の主人公。
仕事帰りにトラックにひかれ、
気づくと5歳児として異世界に
転生。カイルたちに保護され、
憧れだった冒険者になる。

アルト

チナを保護した冒険者
パーティーのメンバー。
優しくて穏やか。

カイル

チナを保護した
冒険者パーティーの、
頼れるリーダー。

ライ

チナを保護した冒険者
パーティーのメンバー。
無口でマイペース。

ミカン

土の精霊王に
仕える九尾の狐。
姉御肌。

C H A R A C T E R S

現代社会で社畜生活を送っていた私、七瀬千那は、ある日の仕事帰りにトラックに轢かれ、気づけば異世界に転生していた。

何故か幼女の姿となり、見知らぬ川辺へ放り出された私は、運良く三人の冒険者と出会う。ワイルド系のカイルさん、麗しのアルトさん、癒し系のライくん。

優しくも厳しい最強冒険者の三人に保護された私は、三人の拠点でもあるルテール町にて、晴れて冒険者デビューを果たしたのだ。

自分の居場所を見つけられたいいものの、私の存在はとんでもないチートものだった。

森の奥深くで出会った土の精霊王様に尋ねれば、私の転生には、この世界の神「アルテナ様」と、六人の精霊王様が関わっていることが判明する。

どうやら私のことが大好きらしい全ての精霊王様に会いに行くため、私はこれから世界を巡る旅をすることを決意した。

仲間となった土の神獣、九尾の狐のミカンを引き連れ、最初に向かったのは王都。

情報収集の末、王都近くの火山で火の精霊王様との出会いを果たすことに成功した。

その後、王城に呼ばれ一悶着あった私たちが、無事にルテール町へと帰還し、疲れきった心と

体を休めるため、ゆっくり過ごすことに決めたのだった。



転移魔道具を使ってルテール町に帰ってきた夜。

私は、自室のベッドでぐっすりと眠っていた。

——ふわふわ、さわさわ、ふにふに。

ひっきりなしに、私の肌が刺激されているのを感じる。

優しく頬をなでるそれが少しくすぐったい。

深いところに沈んでいた意識が、ほんの少しだけ浮上した。

「……ナ。……チナ」

温かくて大好きな声に呼ばれているような気がした。

それでも私は、今の心地よさを手放したくなくて、その声を無視する。

——ふわふわ、さわさわ、ふにふに。

頬をムニツと押してくるのは、柔らかくてぶにぶにした何か。

ペタペタと顔中をつつかれ、少し鬱陶しい。

無意識にそれを手で払い、寝返りを打って無視を決め込む。

少して、再び意識が深いところまで沈み始めた時、ぼすと枕が沈んで意識を引き戻された。

「チナ。……起きてください、チナ」

諦める気のなさそうなその声に、私はようやくまぶたを開いた。

目を開いて初めに飛び込んだのは、薄暗い世界に浮かぶ二つの光。

よく見ればそれはオレンジ色の瞳だと分かり、私は驚いて体をのけぞらせる。

「うわぁっ！ びっくりした……」

そこには、ギリギリまで顔を近づけたミカンの姿があった。

「ミカン？」

いつもと何か違うミカンの様子に、私はじんわりと不安を感じる。

私の目が覚めたことを確認したミカンは、顔を引いてじつと窓の外を見つめた。

「チナ。何か来ますわ」

ミカンのその、真剣味を帯びた小さな呟きに、私はベッドから降りて窓に近づく。

しかし、そこから見えるのはいつもと変わらない裏庭で、その少し奥には静寂に包まれた森が見えるだけだ。

薄暗闇に浮かぶ静かな森。

深夜とも早朝とも言える時間帯にこの森を見ることはめったにないが、改めてよくよく見てみると、その静けさが不気味に感じる。

様子のおかしいミカンの姿も相まってなんだか怖くなってきた私は、ミカンを抱き上げてカイルさんの部屋の扉を叩いた。

「……どうした？」

少しして出てきてくれたカイルさんは、寝起きだとは分からないほどにいつもと変わらない様子で安心する。

「ミカンが、『なにかくる』って……」

私自身も訳の分からないままに、カイルさんにすがりついた。

黙って私を抱きとめたカイルさんは、私の腕からするりと抜け出したミカンに説明を求めたが、ミカンは説明する気はない様子だ。

とにかく外を気にしているミカンを横目に、カイルさんは私を抱き上げてアルトさんを起こしに向かった。

部屋の扉をノックしても出てこないアルトさんに、カイルさんはなんのためらいもなく扉を開いてズカズカと部屋に入っていく。

鍵は閉めていなかったらしい。

「アルト。起きろ」

軽く肩を叩いて呼びかければ、すぐに返事が返ってきた。

「んー。何、まだ暗いよ……」

まだ眠たそうなアルトさんの声。

目をこすりながら起き出してくるアルトさんに、カイルさんは軽く説明をする。

怪訝な顔をしながらも、話を聞いている間に完全に目が覚めたらしいアルトさんは、すぐに準備

を整えて腰に剣を差した。

そのままライクんのところにも向かう。

カイルさんはライクんの部屋の扉をノックすることなく乱暴に開く。

「ライ、起きろ」

容赦なく布団を剥いで、できるだけ顔を近づけて叫ぶ。

端から見れば少しかわいそうに思うが、しょうがない。

ライくんはこのくらいしないと本当に起きないのだ。

現に今も、スピスピと鼻息を鳴らしながらライくんは未だに夢の中だ。

最近は何でも暖かくなってきたからか、布団を剥いても全く気づかない。

耳元で手を打ち鳴らしてみたり、体を大きく揺すってみたりしても効果はない。

やっぱり起きないかと困っていたところに、私たちの隣を何か大きなものが通り過ぎていった。びつくりして一瞬固まったが、その正体はすぐに分かる。

「仕方ありませんわね」

呆れたように呟いたその大きなものは、元の姿に戻ったミカンだった。

久しぶりに見るその神々しい姿に、私は目が釘付けになる。

九本の尻尾をフサツと揺らしたミカンは、うつ伏せになっているライクんの首根っこを啜って、ズルツとベッドから引きずり下ろした。

「ええ……」

そう呟いたのは誰だったか。

誰もがその光景にあっけに取られているうちに、ミカンはライくんをズルズルと引っ張って出ていってしまった。

雲一つない夜空には、爛々と輝く星が一面に広がっている。

ミカンを追って外に出た私たちは、庭の真ん中で呆然と佇んでいた。

大きな姿のままのミカンの隣には、半分目が覚めてフラフラしながらも自分の足で立っているライくん。

真っ白だった寝間着のシャツは、茶色く薄汚れている。

シンと静まり返ったこの周囲に、他の生き物の気配は感じられない。

索敵にもなんの反応もない。

……いったい、何が来るというのだろうか？

ミカンはじっと空を見つめていた。

四人と一匹でじっとその場に佇んでいると、しばらくして夜が明けてきた。

ゆっくりと昇り始める太陽。

消えていく星。

依然として変わらない、静まり返る周囲に眠気を誘われる。

「……なんだ、あの星」

ふわぁっとあくびをしたところで聞こえてきたのは、呆然としたカイルさんの声だった。

「近づいてきて……？」

続いたアルトさんの声に、私は二人の視線を追う。

そこには、薄く見えなくなっていく他の星たちとは対照的に、徐々に大きく、強く輝く一つの星があった。

あまりの異質さに、私はたじろぐ。

一歩後ずさりしたところで、背中がモフツとしたものに包まれた。

後ろを振り向けば、私はミカンの尻尾に包まれており、ミカンの視線はその異質な星へまっすぐに注がれている。

ミカンが言っていたのは、あの星のこと……？

じっとその星を見てみると、それはやはり、こちらに近づいてきていると感じられた。

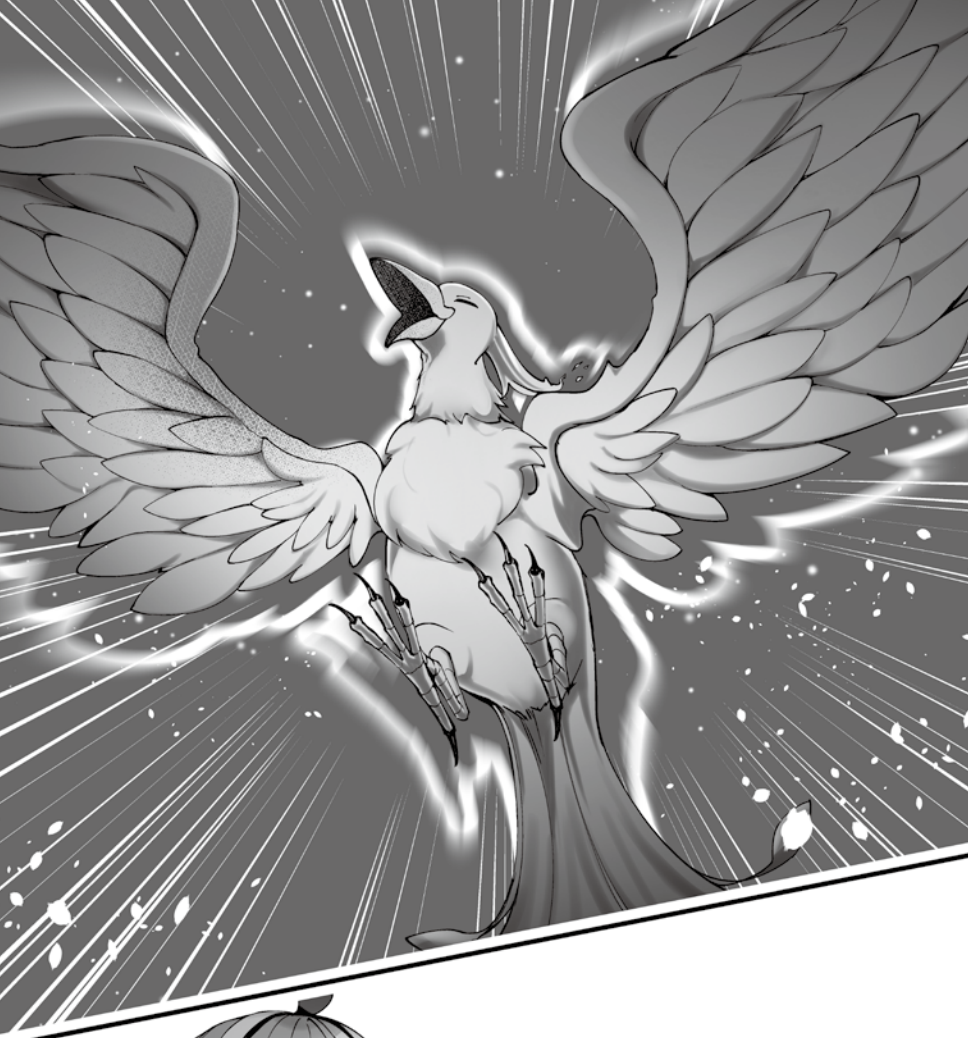
距離が近づくほどに、その姿もはっきりしてくる。

それからさほど時間もかからないうちに、それは目の前までやってきた。

ブワツと風を巻き起こしながら目の前に降り立ったそれは、轟々と燃え盛る真っ赤な炎をまとった、見上げるほどに大きな鳥の姿だった。

太く、鋭い大きなちばし。

頭上できらめく、とさかのような炎。



優雅で美しい、長く伸びた尾羽。

体に沿うように折りたたまれた翼は、轟々と立ち昇る炎に包まれ、パチパチと跳ねる火の粉がその大きな鳥の姿をより一層輝かせていた。

ぐるっと私たちを見回したその鳥は、バサッと翼を大きく広げる。

「……俺様が、来たぞー！！」

天に向かって吠えるようにそう叫んだ鳥に、私たちはあっけに取られて、ただただその姿を呆然と見つめていた。

——なんか、思ってたのとチガウ。

この時、私たちが感じたことは、そう変わらなかったに違いない。

威厳たっぷりな堂々とした姿に見惚れていた私たちは、その、どこか子供じみた言動にどう反応していいのやら、困惑を隠せずにいた。

「はあ。暑苦しいですわ」

静寂を切り裂いたのは、呆れたようなミカンの声。

頭上を見上げると、いかにも面倒くさそうにその火の鳥を見やり、不機嫌そうに九本の尻尾をユラユラと揺らすミカンがいた。

あまり好意的とは思えない視線を向けられている火の鳥は、それでも嬉しそうにその声に反応する。

「お！ お前が今代の土のやつか！ 俺様は火の神獣のフェニックス様だ！ よろしく頼む！」

やはり、この鳥は火の神獣、フェニックスだったか。

炎をまとった鳥なんてフェニックス以外にはいないだろうと思ってはいたが、直接聞かされるとやはり驚きが隠せない。

疲れきって、逃げるように王都から帰ってきたため、すっかり神獣のことを忘れていたのだ。

どうせなら、彼が生まれて火山が噴火する瞬間を見たかったけど……。残念だ。

挨拶を受けたミカンはフンツと鼻を鳴らし、今までとは打って変わって得意げな様子で答える。「知ってますわよ。毎度、律儀なことですわね。……私は三十二代目、土の神獣。ミカンという、チナにつけてもらった唯一の名で呼んでくださいませ」

鼻先をツンと上げ、上から目線で火の鳥を見つめるミカンは、高飛車なお嬢様のような雰囲気をもとっていた。

「知っている」とか「毎度」というのはおそらく、先代たちの記憶のことだろう。

火の神獣は、フェニックス——別名、不死鳥——の名の通り、代替わりというものが存在せず、一つの魂が何度も生まれ変わって誕生する。

彼は、生まれ変わる度に他の神獣たちに挨拶回りのようなものをしているのだろうか？

それは確かに、律儀である。

最初の子供じみた行動からは想像もつかない。

「チナ、つて言うと……」

突然名を呼ばれ、私は驚きと緊張で体を強張らせる。

ミカンの尻尾に包まれているため、ある程度の平静は保っていられるが、何を言われるのか正直ドキドキしている。

ミカンから少し視線を下げたそこにいた私を見て、彼は驚いたように目を見開いた。

「姫様、ちっせえ!!」

第一声がそれとは、少し失礼ではないだろうか？

私は一気に脱力した。

そして、姫様とはなんだろうか……？

私が姫と呼ばれる要因といえは、精霊姫^{まじ}であることくらいだが、それで姫様？

少々失礼な叫びを残したまま固まってしまった神獣に、私は一つ深呼吸をして、口を開いた。

「あの、チナです。はじめまして……」

そう言った途端、大きなくちばしがヌツと目の前に近づいてきた。

後ろにはミカンがいるため、下がることできない。

私は驚きと恐怖で身を固まらせる。

……が、その次に襲ってきたのは痛みではなく、何かすべつとしたものだった。

「ふえ？」

頬を軽くなでるそのすべすべに、私は無意識に両手を上げていた。

目の前に迫り、今私の頬をなでたその大きなすべすべを両手で鷲掴み^{むしつか}し、ひたすらになでる。

すべすべツルツルのそれに私は魅了され、無心になで続けた。

「お、おう……?」

完全に困惑した様子の子の神獣にも気づかず、私はただひたすらに両手の中のそれを観察する。心を奪われていた私は、背中から離れるミカンにすら気づいていなかった。

突然後ろに引つ張られた感覚がしたかと思えば、私は再びミカンのふわふわ尻尾の中に閉じ込められる。

見上げればそこには、呆れた顔をしたミカンと、放心状態の火の神獣がいた。

「あれえ？」

私はまた、やらかしてしまったらしい。

このミカンの顔には見覚えがある。

そう、我を忘れてミカンをモフリ続けた時の顔だ。

若干迷惑そうなお、それ以上に呆れ返った様子の子のミカンの表情。

この顔をさせてしまった後は、しばらくミカンモフリ禁止令が出てしまう、私にとっては絶望的なものだった。

それを私は、この火の神獣にもやらかしてしまっただけ。

「チナは本当に、手触りのいいものが好きですわね……」

しょうがない子を見るような視線を私に向けた後、ミカンの視線は火の神獣に向かい、同情的なまなざしを送った。

困惑から立ち直った様子の子は、首を傾げて私に問いかける。

「なんだ？ 姫様はこの俺様のくちばしが気に入ったのか？」

純粹な疑問を投げかけるようなその声に、私は少し視線を外しながら軽く頷く。

実はその炎をまとった羽毛にも興味があります、とはさすがに言えない。

いつもはミカンのもふもふに夢中であるというのに、なんだか浮気をしている気分である。

「そうか。姫様だったら、いつでも触らせてやってもいいぞ」

嫌がる様子のない彼の姿に、私はホッと胸をなでおろした。

しかし、私を包むミカンの九本の尻尾が、ユラユラと不快そうに揺れ始める。

火の神獣に同情的だったまなざしも、いつの間にか、横目で軽く睨みつけるようなものに変わっていた。

構われすぎるのは嫌だが、だからといって私がミカン以外の誰かに夢中になるのも思うところがあつた。

そういうえば、私がスライムに夢中になっていた時も、なんだかジェラシー的なものを感じたもんな……。

複雑な乙女心というやつだろうか。なんて可愛いんだ……!!

「ミカンが一番だよっ！」という思いを込めて、ふわっふわの尻尾をこっそりとなで回す。

ミカンのなんとも言えない視線と尻尾のユラユラが少し落ち着いたところで、火の神獣が口を開いた。

「それで、お前たちが姫様の保護者ってやつか」

火の神獣は、今まで空気のように存在感を消していたカイルさんたちに目を向けていた。唐突に自分たちが話題に上がり、神獣の視線がまっすぐ彼らを射抜いていることに、三人は硬直する。

初めてミカンに会った時ほどの戸惑いや緊張はなさそうだが、空気に徹していたところに突然声をかけられて驚いているらしい。

三対一の睨み合いは、ほんの数秒の出来事だった。

値踏みするように三人をじっとりと睨みつけていた神獣は、ふっと息をついてその場に漂っていた緊張感を霧散させる。

「なかなか見どころがありそうなやつらだ。王たちが認めたのも納得だな」

その一言が呼び水となって、三人は火の神獣に跪く。ミカンや精霊王たちに初めて会った時のように。

突然の神獣の登場や、その神獣の諸々の発言に、現実味がなかったのだろう。

自分たちが神獣に認識されたことで、ようやくそこに敬うべき存在がいることを実感したようだった。

「うむむ。敬われるのも悪くない。だが、もういいぞ。堅苦しいのは好きじゃないからな」

ほんの少しの間、優越感に浸っていた神獣だが、次の瞬間にはあつけらんかんとしてそう言った。

火の神獣には、親しみやすさを感じる。

ミカンは常に敬語というのもあつてか、高貴な存在のように感じることもあるのだが、火の神獣

はそれとは真逆の、なんとというか、近所のガキ大将のような、親戚のお兄ちゃんのような、そんな親しみやすさを感じるのだ。

口調も態度も、私たちに近いように感じられる。堅苦しいのが好きじゃないというのは、本当のことなのだろう。

現に今も、私たちのことなんて何も気にせず、くちばしで背中の中の羽をついていた。

私たちに気を遣わせないようにするためというよりも、素で周りなんて気にせず自由に振る舞っているような様子だ。

ちなみに彼の背中の羽は炎に包まれているので、端から見れば、炎の中に自ら顔を突っ込む奇妙な鳥にしか見えない。

そんな様子に、カイルさんたちも緊張感を削がれたのか、三人とも立ち上がっていつもと変わらない様子に戻っていた。

「ところで……その二人が王の加護を得ているのは分かるんだが、茶髪のお前とミカンの間にある妙な繋がりはないか？」

その二人というのは、カイルさんとライくん。

カイルさんは火の精霊王、ライくんは土の精霊王の加護を得ている。

神獣には、それがひと目で分かるらしい。……何が見えているのだろうか？

そして、ライくんとミカンの間にある妙な繋がりというのは……？

「それは、私とライが従魔契約をしているからですわね」

なんでもない、世間話のように言ったミカンの言葉に、火の神獣は目を見開いて固まった。「じゅ、従魔契約……だどっ!?」

ここまで分かりやすい驚愕の表情を浮かべる鳥を見たことはあつただろうか。

鳥って表情筋あつたのか……と錯覚してしまいそうになるほど、その顔は驚きに満ちていた。そんな神獣とは反対に「そうだよね、そうなるよね」と私は密かに安堵していた。

ミカンが従魔になると言い出した当時は、人間が主となることに忌避感はないと、なんでもないことのように言ったミカンのかつこよさや、私と契約できないと聞いて落ち込む可愛い姿に気を取られていたが、後から考えれば「神獣が簡単に従魔契約なんてして良かったのか!？」と密かに戸惑っていたのだ。

神獣としてのプライドはないのか! と叫びたくなつたほどに。

神獣が、人間を主として本当にいいのだろうか、という疑問は持ち続けていた。

神獣の主は、本来、精霊王なのだ。

人間とは、比べ物にならないほどの存在なのだ。精霊王も、神獣自身も。

それが、人間の下につくなど……。

だからこそ、やはり、神獣が従魔契約など、普通は考えられないことなのだろう、と火の神獣の反応に安堵した。

良かった、私の考えていたことは間違っていなかった、と。

しかし、その考えは再び覆されることとなる。

彼の驚愕の表情は、私が思っていたものとはどうやら違つたらしいのだ。

「そんな面白そうなこと、俺様もやるに決まつている!!」

——なにをいつているんだろうこのしんじゅうさまは。

神獣が従魔契約を結ぶなんてありえない、という理由で驚いていたのかと思つたのに。

面白そうだと思つていただけだなんて……。

正直、理解不能である。

火の神獣のこの発言を聞いてからだ、ミカンの考えがかなりまともに感じる。

私についてくるために従魔になった。

実際それは必要なことだつたし、ミカンからしたら何もためらうことはなかつたのだろう。

プライドがどうか考えていた私がバカらしくなつてきた。

火の神獣はウキウキとした様子でミカンの話を聞いていた。

私の従魔にはなれない理由や、ミカンがライくんを選んだ理由についてだ。

それを聞けば、この神獣の主人となるのが誰か、考えなくても分かる。

その本人も自覚しているようで、若干顔が引きつっていたが、私は見ないふりをした。

ごめん! 私にはどうすることもできない……!!

したり顔の神獣が、いそいそとカイルさんの前に行く。

そして、胸を反らし、両方の翼を広げてこう言った。

「王の加護を得たお前は、俺様の主人にふさわしい。光様に思うが良いぞ」

フンツと鼻を鳴らして得意げな様子だ。

契約上、従う側になるはずの存在がここまで尊大な態度を取るなんて前代未聞だ……。思わず遠い目になってしまったのは、私だけではなかった。

大きく息をついたカイルさんは、覚悟を決めた目で手を差し出す。

「……分かった。よろしく頼む」

カイルさんが差し出した手に、翼を折りたたんだ神獣がちよこんとくちばしを乗せた。握手をしているようなその様子に、思わずほっこりしてしまった。

「じゃあ姫様、俺様に名前をつけてくれ！ かつこいいやつで頼むぞー」

期待で目を爛々と輝かせた神獣がこちらをまっすぐに見つめる。

——そうか、そういうえはあったな、そんなこと。

一番の難関、名づけイベントの再来だ。

私は内心、頭を抱える。

ほっこりしてる場合じゃなかったよ！

どうするんだよ！ 考えてなかったよ！

ほんと、ネーミングセンスだけは努力でどうにかなるものじゃないと思う。

どうして私にこんな難題を課すのか。

いや、理由は分かっているんだけど。

神獣の主である精霊王が姫と定めた存在だもんね、私。

そりゃ、特別視するよね。

だからって名づけ親にするのは勘弁してほしいけどね！

まあ、言われてしまったものは仕方がない。

ない語彙力を必死に絞り出して、火の神獣らしく、そしてかつこいい名を考えなければ……。

火の鳥、フェニックス……。

燃え上がる炎、真っ赤な炎、情熱的……。

シンプルに「ホムラ」とかどうだろうか。

真っ赤に燃え上がる炎をまとった、火の鳥にピッタリだと思う。……多分。

ドキドキと緊張で高鳴る心臓を抑えて、口を開いた。

「ホムラ……って、どうかな？」

ミカンの時は、思わず口に出してしまった言葉がそのまま採用されたから、こんな緊張感はなかった。

気に入ってもらえるか不安で、少し怖い。

「ホムラ、ホムラ」と口の中で何度か呟いた火の神獣が顔を上げ、まっすぐにこちらを見つめる。

「良い名だ。ありがとう、姫様！」

火の神獣は、満面の笑みを浮かべていた。……鳥だけだ。

なんでこんな分かりやすい表情を浮かべられるのだろうか？ 本当に不思議だ。

何はともあれ、ホムラという名は気に入ってもらえたようだ。良かった。

ホムラはカイルさんと向かい合って宣言する。

「さあ、俺の名は決まった。契約を始めるぞ」

カイルさんもまっすぐにホムラを見つめ返す。

「ホムラ。……俺は、カイルだ。これからよろしくな」

「ああ！ カイル、よろしく頼む！」

ヌルツと契約が完了してしまった。

怒涛の展開だったな。

ひとまずこれで一件落着か？

ホムラのペースに乗せられて、そのまま従魔契約まで結んでしまったけど、本人たちが納得しているなら私が言うことはない。

ホムラは、カイルさんたちと交流を始めたようだ。アルトさんとライくんもようやく挨拶できたようだし、もう私の役目は何もないだろう。

一息ついたら安心して眠くなってきた。

起こされたの、目が出る前だったもんな。

もうすっかり日も昇りきっている。

私は大きなあくびをして、ぼすんとミカンの毛皮に埋もれた。

……その直後、遠くの方から雄叫びのようなものが聞こえた気がした。

「うおおおおー！！」

突如鳴り響く、獣の咆哮のような音に、私は肩を震わせる。

ズドドドドド、と地響きのようなものも聞こえてきた。

顔を上げた私は、その音がした方に視線を向ける。

どうやらその音は町の方から聞こえてきたもののように、その方向から、土煙を上げて何かが向かってきているのが見えた。

「つぎはなに!？」

思わず叫んでしまったのも致し方ないことだろう。眠気も一気に吹き飛んでしまった。

正体不明の何かが、ものすごい勢いでこちらに向かってくる。

それは、恐怖以外の何ものでもない。

突然やってきたホムラのことがようやく落ち着いてきたばかりだというのに、こんな短時間で同じ恐怖を二度も味わうことになるとは思わなかった。

そろそろ、ゆっくり休ませてほしい。

今の状況で分かることは、こちらに向かってきている何かは地を走っているということ。

そして、人間に近い姿をしているということ。

薄っすらと見えるシルエツトから、それだけは分かったが、その正体が何かまでは分からない。

最強の冒険者三人に神獣が二匹もついている今の私に敵うものはいないだろうが、正体の分からないものをただ待ち構えるだけというのも精神的に負担がかかる。

震えそうになる体を押さえつけて、とりあえず、すぐに逃げられるようにだけしておこう。

一番弱い私は、変に手を出さずに逃げるに限る。

だんだんと近づいてくる謎の土煙の中の影は、近づけば近づくほどにはっきりと人の姿をとっていく。

これ、本当に人だったりして……と思ったところで、再び、咆哮のような叫び声が聞こえてきた。「お前らあ、無事かぁー……!!」

その声を聞いて、私はドツと脱力する。

あまりの安心感にへたり込みそうになったが、ミカンが支えてくれたおかげで、かろうじて立っていられた。

カイルさんたちも、警戒を解いたようだ。

何も分かっていないホムラだけは、爛々と目を輝かせて臨戦態勢を取ったままだ。

ただ、私たちが警戒を解いたことが分かったのか、殺意を帯びていた気配が、なんだかワクワクしたものに変わっていた。

もうすぐそこまでやってきた土煙の正体は、私たちの目の前でズザーッと急ブレーキをかける。そのせいで余計に土煙が舞い上がって、視界が奪われた。

手で顔を覆い、目を守りながらそれが収まるのをしばらく待つ。

「お？ なんだなんだ？」

視界が閉ざされた中、楽しそうなホムラの声だけが響く。

その姿は一切見えていないというのに、そわそわと浮足立つホムラの様子がありありと脳裏に浮

かんだ。

手の隙間から土煙が収まったのを確認して、両手を下ろす。

顔を上げるとそこには、目をまんまるに見つめ合うホムラとダン爺の姿があった。

「……なんだこのでっけえ鳥は！」

少年のように目を輝かせて、ホムラの周囲をぐるぐる回り、観察を始めるダン爺。

そのダン爺を目で追い、自らもその場でぐるぐる回り出すホムラ。

二人してぐるぐる回る姿は、なんだか滑稽こっけいだった。

少しして満足したのか、二人はピタリと立ち止まる。

そして、二人してグルンとカイルさんに視線を向けた。

「カイル！ なんだコイツは！」

怒鳴りつけるような大声で、しかし楽しそうな、嬉しそうな声色で叫ぶ二人は息びつたりだ。

二人の叫び声を真正面から受けたカイルさんは、顔をしかめ、耳を手で覆いながらもその質問に答える。

「こっちはダングルフ。この町のギルマス……あぁ、そこそこ偉いやつだ」

ギルマスという言葉にキョトン顔のホムラを見て言い直したはいいが、かなり大雑把な説明である。

まあ、偉い人なのは間違いないんだけど……ダン爺はそれでいいの？

「こっちはホムラ。火の神獣で、ついさっき俺と従魔契約を結んだ」

そのままホムラの紹介を始めるカイルさん。

こっちも大雑把な説明だ。……まあ、他に言うこともないか？

ダン爺とホムラは互いに手を取り合って——手と翼を取り合って？ 握手していた。

ダン爺は、ホムラが神獣と聞いても変わらぬ態度だ。

ミカンの時もそうだったけど、この大きな姿のホムラを見ても変わらないとは……。

ダン爺は間違いなく大物である。

「それにしても、でかいなあ……」

何を思ったのか、突然ダン爺が私に視線を向けてきた。

明らかに私とホムラを見比べているその様子に、若干イラッとする。

あの様子だと、ホムラは私何人分か、とか考えていそうだ。

どうせ私は小さいですよっ！

ふと、私から視線を外して、私の上の方に視線を向けたダン爺が固まった。

突然様子が変わったことに、私も困惑する。

ダン爺の視線を追うとそこには、ぼんやりと遠くを見つめるミカンがいた。

ミカンはふわっと尻尾を揺らしてダン爺にチラリと視線を送る。

呆然としたダン爺の姿を見てコテンと首を傾げたミカンは、パチクリと目を瞬いて口を開いた。

「そういえば、この姿でお会いするのは初めてでしたわね。ミカンですわ」

ああ、そういうことか。

小さな姿のミカンしか知らないダン爺にとって、この元の姿のミカンは誰か分からなかったのだらう。

それも、ホムラと変わらない大きさなうえ、私の真後ろにいたのに、今まで一切気がつかなかったのだ。

何気にミカンは、気配を消すのがうまいらしい。知らなかった。

ダン爺は驚いた表情のまま固まってしまった。

ここまで動揺しているダン爺はめつたに見られるものではない。

ダン爺はいつも堂々としていて、何が起きても冷静でいられる精神力を持っている。

おそらく、ギルマスという「冒険者を束ねる立場にいる」というのもあるだらう。

トップが動揺した姿を見れば、その下につく者まで不安が広がる。

だから、ダン爺のこんな姿を見られるのは、レア中のレアなのだ。

驚きの表情のまま、視線をほんの少し下に下げたダン爺は、ようやく口を開いた。

「お、お前、その首輪どうなってるんだっ!?」

——辺りは静まり返る。

誰もが冷めた視線でダン爺を見つめていた。

「い、いや、気になるだろ!?」

確かに、大きな姿のミカンの首にも、デザインはそのままの首輪が違和感なくはまっている。

ミカンの大きさに比例するように首輪の大きさも変わっていたらしいが、あまりに馴染みすぎて

特に気にならなかった。

正直、ミカンが自分の大きさを換えられることを知っている私からすれば、首輪の大きさを変え
るのも簡単なのだろうかと思われないが……。

ただ、少し気になるのは、大きくなった首輪は、そこについていた宝石もそのまま大きくなって
いるのだ。

小粒の宝石がキラキラ輝いて可愛らしい首輪は、大粒の宝石がゴージャスな美しい首輪に様変わ
りしていた。

あれ、売ったらいくらになるんだろう？

考えるだけで恐ろしい……。

密かに身震いする私を横目に、ミカンはポンッと一回転して小さな姿に戻った。

さっきまでダン爺を見下ろす位置にいたミカンは、今は首をほぼ真上に向けてダン爺を見上げて
いる。

「このくらい、造作もないことですわ」

ツンとおすまし顔で行儀良く座るミカン。可愛い……。

ダン爺は「ほほお」と目を見開いて感心していた。

「……な、なんだそのちんまい姿は!!」

辺りに響き渡った叫び声は、ホムラのものだ。

さつき出会ったばかりのホムラは当然、大きな姿のミカンしか知らない。

歴代の土の神獣たちはみんなミカンに似た姿だったのだろうか。

この小さな姿が変わってしまうのは、やっぱり神獣の中でも珍しいことらしい。

「元の姿のままだと人間社会に溶け込めませんかからね。あなたもチナたちに迷惑をかけないよう、
小さく目立たぬようにするのをおすすめしますわ」

なるほど、と頷いたホムラは、次の瞬間には姿を消していた。

キョロキョロと辺りを見回してみても、ホムラの姿はどこにも見えない。

成人男性より大きなホムラが一瞬にしてどこに消えたのか。

空を見ても、影すら見えないことに困惑する。

「おい、姫様。ここだぞ」

笑いを含んだホムラの声が、驚くことに近いところから聞こえてくる。

声がある方——私の足元に視線を下げるとそこには、雀ほどの大きさのまんまるの赤い小鳥の姿
があった。

私の手のひらに収まりそうなほどの小さなその姿に、私はすぐに手を差し出す。

ぴよんと飛び跳ねて私の手のひらに収まったホムラは、心なしかドヤ顔をしているように見えた
「俺様にかかれば、ここまで小さくなることもできるのだぞ。どうだ、姫様。この姿は気に入った
か？」

流し目でこちらを見ながらキザなポーズを取るホムラ。

本人としてはかっこつけているつもりだろうが、正直可愛いしかない。

「うん、すごい！ これでいつでもいっしょにいられるね！」

フンと鼻を鳴らしたホムラは、パタパタと翼をはためかせて飛び上がった。

ホムラの向かった先は、カイルさんの頭の上。

ちよこんとそこに収まったホムラは、ツンツンと小さなくちばしでカイルさんの髪をついばみ出した。

「うむ。今日からここが俺様の定位置だ」

満足げな顔のホムラ。

さっきのツンツンは巢作りをしていたらしい。

若干カイルさんの頭がもさつとしている。

真っ赤な小鳥を頭上に住まわせる、嫌そうな顔をしたカイルさん。

その間拔けな姿をクスクス笑っていると、キッとカイルさんに睨まれた。

私は慌てて視線を逸らし、知らんぷりする。

そして、逸らした視線の先にいたのは、後ろを向いて肩をプルプルと震わせているアルトさんと

ライくん。

ライくんがあんなに笑うなんて珍しい、と目を丸くしていると、二人の頭にカイルさんのげんこ

つが落ちた。

ゴツンといい音がして、二人は頭を抱えてしゃがみ込む。

あれはかなり痛そうだ。

私にまで落ちてこなくて良かった……。

はあーとため息をついたカイルさんは、疲れた目でダン爺の方に視線を移した。

「で、ダングルフは結局、何しに来たんだ？」

そういうえば、ダン爺は何かを叫びながらすごい勢いでやってきたんだって。

あの時の様子からして、何かあったのかと思っただが、大丈夫だったのだろうか？

ホムラを視界に入れた途端、完全に興味がそっちに移ってたからな。

ハツとしたダン爺は、ホムラを見つめて一人頷く。

「ああ、そうだった。冒険者の連中から、何かでかいものがこっちに向かってきてるって連絡を貰ってな。外に出てみればちょうど、そのでかいものがこの辺りに落ちてきたように見えたから、

急いで様子を見に来たんだ。……あれは、ホムラだったんだな」

ホムラの姿が見えてから、ここに降り立つまでの時間はそれほど長くなかったように思う。その上、夜も明けたばかりの早朝だったのだ。

他にホムラの姿を見ていた人がいたなんて、考えてもいなかった。

カイルさんたちですら、何が向かってきているのか分からなくて警戒していたのだから、一般の

冒険者が急いでダン爺に連絡するのも当然のことだろう。

それで心配して、急いで来てくれたのか。

ダン爺の興味があっさりホムラに移ったのも、私たちの無事を確認したからだっただろう。

「その連絡をくれたやつらには、町に混乱を起こさないように、黙つとけと言っておいたから大丈

夫だ。帰ったら……まあ、特に問題はなかったとは報告するさ。王城関連だとも匂わせておけば追及されることもねえだろ」

そんな適当でいいのかと少し心配は残るが、ホムラのことが広まる心配はなさそうだ。ここはダン爺に任せておこう。

「それにしても、ホムラも従魔になったのなら、従魔登録をしなければな」

そう言いながら、スツと私を抱き上げるダン爺。

いつもの調子に戻ってきたようで、何よりです。

ガツシリした安定感のある腕に支えられた私は、そのままダン爺に身を預ける。

「鳥型の従魔には足環あしわをつけてもらうんだが、このサイズの足環、あったかなあ……」

鳥型の従魔といえは、フクロウや鷹のような姿のものが一般的である。

従魔とは、いわば、ともに戦う仲間。相棒だ。

人とともに戦う力など持たないであろう小鳥が従魔になることなど、ほぼない。

そして、今は雀ほどの大きさしかないホムラ。

脚もちろん、小枝のようにほっそりとしている。

このサイズに合う足環はもちろん、元の姿の大きすぎるサイズの足環もないだろう。

どうするんだらう……。特注……？

ダン爺の温もりに包まれている私は、ぼんやりしながらそんなことを考えていた。

気づけば眠っていたようで、いつの間にかふかふかの布団に包まれている。

窓から覗く太陽は、もう真上にまで昇っていた。

「おう、起きたか、チナ」

「うん。おはよう」

目をこすりながらリビングを覗けば、そこにはダン爺以外のみんなが集まっていた。

ダン爺はすでに町に帰り、みんなはあのまま、起きていたらしい。

パタパタと目の前に飛んできたホムラに両手を差し出すと、そのまま手の中にすっぽり収まる。

ふわふわの羽毛を堪能していると、ホムラがそわそわしながら、こちらをチラチラ見ていること

に気がつく。

なんだ？ と首を傾げると、その脚に、小さな小さな足環がついているのが目に入った。

「あれ、もうじゅうまとうろくしたんだ。ホムラにあうあしわ、あったんだねえ」

これに気づいてほしかったのか。

ホムラにも可愛いところがあるらしい。

「これは俺様が自分のサイズに合うように大きさを変えたただけぞ。それよりも、どうだ？ この

デザイン」

なるほど。

ミカンが自分の体に合うように首輪の大きさを変えていたように、ホムラもそうしたのか。その

手があったことを忘れていた。

ホムラが差し出した脚をじっくり見ると、足環には繊細な美しい模様が入っているのが見えた。「うわぁ！　きれいでかっこいい！」

「そうだろ！　これは俺様がデザインして、自分で彫ったんだぞ！　元のはすげえダサかったからな！」

ホムラが気づいてほしかったのはこれだったらしい。

渾身のドヤ顔で、翼をバタバタさせている。

生き生きとしたちっちゃいホムラに癒やされる。

それにしても、ホムラにこんなセンスがあるとは。

ミカンも速攻で可愛い首輪に変えてたし、神獣って、意外とオシヤレ好きなのかな？

「チナちゃん、おなかすいてない？　軽く作ったのあるけど、食べる？」

ホムラとほのぼのしているところにアルトさんの声がかかった。

その言葉を聞いた途端、自分のおなががペコペコなことに気づく。

朝ごはん逃したしね。

「たべる！」

そう返事すると同時に、私のおなが「ぐう」と鳴る音が響き渡った。



ホムラがやってきて数日が経った。

今日は、ここ数日で分かったホムラの一日の過ごし方を紹介しようと思う。

ホムラの朝は早い。

日が昇ると同時に目を覚まし、そのまま朝の散歩へ行く。

ホムラはかなり寝起きがいらしく、朝からうるさいくらいに元気がいい。

ホムラがやってきて最初の数日は、私もホムラと同じ時間に起こされていた。

何故なら、ホムラが外へ出るには誰かが窓を開けてあげないといけないから。

その役目は必然的に、一緒に寝ている私のものとなる。

しかし、さすがに毎日こんな時間に起こされてはかなわない。

ということでは私は、ホムラ専用の出入り口を作ることにした。

ここで、実はあまり使うことのない創造魔法の出番だ。

私が考えたのは、軽く押せば簡単に開くようなペット専用の出入り口。

それを天井近くの壁に作ることにした。

出入りするの小さい姿のホムラなので大きさはそんなにいらぬ。

思いついて十センチ四方の穴を開けてしまい、そこにホムラでも簡単に押せるほど軽い板をつける。

上部だけ蝶番のようなものをつけ、内側にも外側にも開くようになっている。

ついでに、創造魔法で防虫加工をして完成だ。

これを私の部屋、カイルさんたちの部屋、リビングにも作った。
私の部屋からしか出入りできないのは不便だろうからね。

ホムラはこの専用扉を気に入ってくれたようで、毎日楽しそうに飛び回っている。
朝の散歩を終え、帰ってくるのはちょうど私たちの朝食の時間だ。

いつも不気味なほどびびったり、食事の準備が終わった頃に帰ってくる。

一度、何故そんなにちよいどいい時に帰ってこられるのか聞いたことがある。

その時ホムラは、お得意のドヤ顔で「勘だ！」と言いつつ放った。

さすがの私も、これには何も言えなかった……。

ホムラはいつも、私たちと同じものを食べたがる。

ただ、体が小さいのでそんなに量は食べられない。

そんなホムラのために、ライくんがホムラ専用の食器を作ってくれたのだ。

ミニチュアサイズの可愛い食器をあつという間に作り上げてしまうライくんの手腕には、惚れ惚れする。

そんな小さな食器に料理を盛るのは難しいが、慎重に乗せていくのがバランスゲームをしている
ようで、実は楽しかったりする。

今のところホムラは好き嫌いもないようで、毎日大げさなほどに喜んで食べてくれる。

作っている側としてはこれ以上に嬉しいことはない。

一心不乱についばむせいで、くちばしの周りを盛大に汚してしまうのは、まあしょうがない。

ホムラの満足そうな顔を見られるだけで、私は十分だ。

口元を拭ってあげれば、ホムラはそのままカイルさんの頭の上へと飛び乗る。

軽く髪を整えて居心地の良い場所を作れば、そこで一休みの時間だ。

これにはカイルさんもずいぶん慣れたらしい。

最初は居心地が悪そうに、何をしても頭の上のホムラに気を遣っていたが、今ではホムラ
なんていないものとして扱っている。

うがいをするために頭を上げ下げするのも、ドカッとソファに横になるのも、まるで自然体だ。

どうやっているのか、その間もホムラは微動だにしない。

おそらく何か魔法を使っているのだろう。

そんなことができるのなら、自分で窓を開けるのくらいできそうな気がするが……まあいいだ
ろう。

みんなで食休みをした後は、私の鍛錬の時間だ。

これは毎日ローテーションでカイルさんたちが一人ずつ指導についてくれる。

この鍛錬の時間は基本、ローテーションが一周回れば一日休みといった感じで行っているが、た
まに二人や三人ともがついてくれることもあるし、私が自主的に鍛錬していることもあるので、
しつかりと決まっているわけではない。

この時のホムラは、基本カイルさんについていることが多い。

カイルさんが指導につけば、ホムラは空を飛びながらそれを眺めている。

気まぐれに私の相手をしてくれることもある。小さくても神獣なので、私の攻撃なんて当たったとしてもどうってことないそうだ。

ホムラは小さいとなり、私の周りを飛び回る。

小さくてすばしっこい彼に攻撃を命中させるのは至難の技だ。未だに一度も当てられたことがないのが悔しい。

カイルさんは時々、一人でフラッと出かけることもある。その時ホムラは、カイルさんについていく。

もちろん、カイルさんがぐーたらする日は、ホムラも部屋でのんびりしているのだ。

昼食は朝食時と同じように私たちと同じものを食べる。

この時ばかりはカイルさんが外に出ているもホムラだけは帰ってくるのだ。

どれだけ家庭料理に飢えているのだろうか。たまにはカイルさんと一緒に夕食でもしてくれればいいのに。

まあ、求められること自体は嬉しいので文句があるわけではないのだが。

その後は食休みの時間だ。

カイルさんがいればもちろん頭の上に。カイルさんがいなければホムラ専用のカゴの中に。

ホムラのカゴは、これまたライくんが作ってくれた。中にはふわふわの綿が敷き詰められている。

これは、最初の頃、ホムラが頭の上にいることが気になってしょうがなかったカイルさんの要望でできたものだ。

結局、このカゴはカイルさんがいない時しか使われていないのだけど、こうやってたまには活用されているのでリビングに設置されるようになったのだ。

午後のホムラは、私とともにいることが多い。

何をするかは日によって様々だが、ここ最近では冒険者活動をすることが多い。

とはいっても、私がするのは薬草採取くらいだ。家の裏の森に入り、常設依頼の薬草を採取する。最近では少し行動範囲を広げて、新たな薬草の群生地を探すことも多い。あまり同じ場所で採取しすぎると増えなくなってしまうかもしれないからだ。生態系を崩さないよう、気をつけて採取を行っている。

もちろん、同じものばかりではなく、それ以外の薬草や山菜を採取することもある。山菜はアルトさんに渡せば美味しい夕食にしてくれるのだ。アルトさんは本当に料理がうまい。

ホムラはそんな時、私の上をピュンピュン飛び回ったり、どこに何があったか教えてくれることもある。

意外なことにホムラは、一度教えたことはすぐに覚えてしまうのだ。

ホムラが初めて薬草採取についてきた時、気まぐれにいろいろ教えながら採取していたのだが、ホムラはその一度でほとんどの薬草を覚えてしまったのだ。

興味ないだろうし、すぐに忘れるだろうなと思っていたのに、ホムラはそれから薬草を見つければ教えてくれるようになった。

ますます仕事がかどるばかり。どんどんランクアップへの道が近づいている。

ホームラが手伝ってくれるのは嬉しいが、ランクアップはもつとのんびりでいいのに……。冒険者活動をしない日は、のんびりぐーたら過ごしたり、薬草を納品しにギルドへ行ったりしたりすることもある。

裏庭にごろんと寝転がって空を見上げると、気持ち良さそうに空を飛ぶホームラが目に入るのだ。ホームラは本当に空を飛ぶのが好きらしい。暇さえあれば飛んでいるように思う。

この前は、今の小さな体でどこまで速く飛べるか研究をしているようだった。

そんなふうにはフリーダムな時間を過ごした後、私はアルトさんの夕食作りを手伝いに行く。

その間もホームラは、どこかいろいろな場所を飛び回っている。

そしてまた、夕食の時間になればびびったりに帰ってくるのだ。外に出ていったカイルさんを連れて帰ってくることもある。

ホームラの体内時計、侮れない。

夕食後、ホームラはお風呂には入らない。その代わりに、時々水浴びをしている。

これまでライくんが、ホームラの水浴び用の器を作ってくれたのだ。

ミニチュアのお風呂みたいですごく可愛い。そんな専用のお風呂で水浴び中のホームラは、少々メルヘンな光景となっている。

寝るまでの時間はカイルさんの頭の上で過ごしている。

大人たちは晩酌をすることもあるようだが、ホームラもそれに付き合っているらしいのだ。

なんとホームラ、お酒が飲めるらしい。酔うことはないが、味が気に入っているため、度々カイル

さんにねだっているようだ。

私はみんなよりも早く寝てしまう。まだ子供なので。

ホームラは適当な時間に私の部屋に入り込み、枕元に置いてある小さなカゴの中で寝ているらしい。私よりも遅く寝て、私よりも早く起きているため、私にはホームラと一緒に寝ている実感はないのだが、ミカンがそう言っていたのでそうなのだろう。

ちなみにミカンは、いつも私が抱きしめて一緒に寝ている。もふもふで暖かくて、ものすごく寝心地が良い。

そんな感じで、ホームラの一日は終わりだ。

思い返してみれば、ホームラは本当に一日中飛び回っているのだなと感心する。

普通の鳥も、このくらい飛んでいるものなのだろうか？

少し目を離せば、すぐにどこかへ行ってしまうようなホームラだが、毎食時間になればしっかりと帰ってくるあたり、ここでの生活を本当に気に入ってもらえているのだろう。ホームラにとっても居心地のいい場所となっているようで嬉しく思う。

ホームラは、以前の人生では常に世界中を飛び回っていたそうだが、今回の人生では私たちとともに過ごすことに決めてくれたようだ。たまにはこんなふうなのんびり生きるのも悪くない、とのことだ。

これから、長い時をホームラとともに過ごすことになるのだろう。

まだ出会って日が浅いホームラだが、彼が何者にも縛られることのない、自由な存在なのだという

ことは分かっているつもりだ。
ホームラがこの生活に飽きて出ていってしまわないように、これからたくさん楽しい経験をホームラとともにしていきたいと思う。

2

つまらない。

鍛錬と薬草採取を繰り返すだけの日常。

目に映るのは、緑の芝生、緑の森、緑の薬草。

……いい加減、飽きてきた。

旅をしている間は楽しかった。

毎日が新鮮で、似ていてもどこか違う、毎日変わっていく景色にワクワクして。

大変なことも、疲れることもたくさんあったが、それでもやっぱり、楽しかったという気持ちが一番に来る。

刺激的な時間が過ぎ去ると、残ったのは楽しかった思い出と代わり映えのない日々。

何か、新たな刺激が欲しい。

ワクワクして、ドキドキして、キラキラ輝くような時間が……。

裏庭の芝生に寝っ転がって、悠々と飛び回るホームラを見上げながら、そんなことを考えていた。

ブーツとホームラの姿を目で追っているうちに、私はどうやら眠ってしまったらしい。

目を開けば、さっきよりほんの少しだけ上に昇った太陽が、サンサンと私を照らしていた。

太陽の眩しさにクラリとめまいがして、目をすがめる。

腹筋の力で上半身を起せば、ちょうど、清々しい爽やかな風が吹いた。

起き上がったことで、私のそばで寝ているホームラの姿が目に入る。

寝ている私に釣られたのか、単に飛び疲れて休憩していたのか。

ぐっすりと眠り込んで起きる気配のないホームラに、時間がまったり流れるような心地がした。

と、そこで、見慣れないものがホームラの下にあるのに気がつく。

「……ウオータークッション？」

丸くて、つるつるで、柔らかそうな水色の何か。

まるでホームラのために作られたベッドのようなフィット感だ。

また何か、ライくんかアルトさんか作ってもらったのだろうか？

ツンツンと指でつついてみると、それはぷにぷにで、少しひんやりとしていた。

なんだか癖になる感触に、ぷにぷにとつついたり、なでてみたりしていると、突然そのウオータークッションらしきものが、プルンと自ら震えたように感じた。

びっくりして手を離し、じっと観察してみたが、それはピクリともしない。

気のせいだったか？　と思ひ直し再び触れると、再びプルプルと動き始めるのを感じた。
——ぼふよん。

水色の物体は突然、そんな効果音がつきそうな動きを始めた。ふにゃんと潰れてから、一気にもちっと伸び上がり、再び潰れる。

その反動で投げ出されたホムラは、芝生で何度かバウンドして、コロコロと転がっていった。しかしホムラは目を覚ますことなく、そのままぐっすり寝ている……。

しかしいつたい、この謎の物体はなんだ？　ともう一度よく観察してみる。

もちもちと伸び縮みを繰り返す水色の半透明な物体。

生き物には見えないが、しかしそれは生きているようだ。

そして、さつきはホムラに隠れていたため見えなかったが、その物体の中には、少し色が濃くなった丸い塊が一つ。

まさかとは思ったが、やっぱりこれは……。

「スライムだ！」

旅の中で幾度も出会った、可愛い魔物。

しかし、こんなところにスライムがいるとは思わず、全然気がつかなかった。

このルーテル町には、スライムはいないはずだった。

何故なら、この町に隣接する森——私が生まれ落ちた川周辺の森は、凶暴な魔物の生息地なのだ。こんな危険な場所では、スライムは生きていけない。戦う術を持たない、か弱い魔物なのだから。

スライムは、少なくともリッテン町付近まで行かないと出会えないはずなのに……。

いつものように持ち上げようと両手を差し出せば、スライムはコロコロとこちらに転がってくる。今まで出会ったスライムたちは、逃げることにそなっていたが、こんなふうになら近づいてくることもなかった。

スライムに意思はないものだと思っていたが、そういうわけでもないのか……？

珍しいスライムの反応に目を丸くしているうちに、すぐそばまでやってきたスライムが私の手にすり寄ってくる。

すべすべつるつるの肌触りと、私の手に体を押しつけるようにすり寄ってくる姿に、私はもうメロメロだ。

直前まで考えていたことは頭の中から吹き飛んで、私はすっかりスライムを愛することに夢中になってしまっていた。

「チナちゃん、ごはんだよー！」

どのくらいの時間そうしていたのか、気づけばもう昼食の時間になっていたようだ。

時間を忘れてしまうほど、私にとってスライムは魅力的なのである。恐ろしい存在だ。

名残惜しく思いながらも、私はスライムをそっと地面に下ろしお別れをする。

スライムとはいえ、魔物を連れ帰ったらさすがに怒られそうだからな。みんなも私のスライム愛は知っているけど、完全に引かれてるし……。

「じゃあ、いくね。よかったらまた、あいきてね」

最後によしよしとスライムをなでて、私は昼食を取りに戻った。スライムと別れた私は、すぐに手を洗ってリビングへと向かう。

リビングには、カイルさんとライくんはいなかった。どうやら、町へと行ってしまったらしい。今日は少し寂しい食卓になりそうだ……と思ったのだが、先にリビングへと入っていったホムラが、机の上に広がる光景に目を輝かせているのを見て、おや？ と首を傾げる。

ホムラの視線を追えばそこには、ツルツとした黄色い麺、細長く切ったキュウリやハム、卵などの具材がたくさん並んでいた。

「ひやしちゅうかだ！」

夏の定番、冷やし中華はこの世界にも変わらず存在している。

これを見ると「夏だなあ」と感じるのは、地球もこの世界も同じらしい。

席に着いた私は早速、自分の麺の上に具材を盛りつける。

全ての具材をバランス良く円形に盛りつけるのが、私のこだわりだ。

ホムラに急かされ、ホムラとミカン用のお皿にも、同じように綺麗に具材を盛りつけていく。

小さな器に小さな冷やし中華を作るのは難しいけど、私の技術力が試されているようでワクワクする。

ホムラも、目の前で料理が完成していくのを見てなんだか楽しそうだ。

完成したミニチュア冷やし中華を満足気に披露して、みんなで仲良く食事を始めた。

私の器の中が半分ほど減った頃、先に食べ終えたアルトさんがお茶を持って戻ってくる。珍しくおかわりしていたホムラもすでに食べ終え、のんびり毛づくろいをしていた。あの様子だと、すぐにまた寝てしまえそうだ。

私はみんなより食べるのが遅いけど、みんなはそんな私を急かしたり先に戻ったりせず、こうしてまったりお茶を飲みながら待っていてくれるのだ。優しさが心にしみる。

「ごちそうさまでした！」

焦らずゆっくりと、味わいながら自分の分を食べ終えた私は、ふうと満足感にため息をつく。

後片付けを始めたアルトさんに、私も手伝おうと立ち上がれば、アルトさんの背後から何やら見覚えがあるものがチラツチラツと覗いているのが見えた。

一生懸命、アルトさんの後ろから顔を出そうと伸び上がり、ぴよこぴよこしているそれに、私は驚きの声を上げる。

「うええ!? なんでここにいるの!？」

つるんとした丸いシルエツト。みずみずしい水色の体。

それは、さっき別れたばかりのスライムだった。

私の驚きの声に反応して後ろを振り返ったアルトさんが、一瞬固まって、静かに声を上げる。

「チナちゃん。元いた場所に返してきなさい」

静かな威圧感のある声に、反射的に背筋が伸びる。

しかし、私が怒られるのはなんだか腑に落ちない。どうして私のせいだと決めつけてしまうのか。

立ち読みサンプル
はここまで

まあそれは、私の並々ならぬスライムへの執着を見ればそう思うよね、と頭の片隅で考えながら、私はアルトさんに反論した。

「わたしがつれてきたんじゃないよ！ さつきばいばいしたのに、しらないあいだにはいりこんでたの！」

さすがに、私が黙って連れ込んだとは思っていなかったのか、アルトさんは肩を下ろしてため息をつく。

「うん、分かってる。ごめんね。はあ……。それにしても、どうしてこんなところにスライムが？」アルトさんの疑問は、私が思っていたものと同じものだった。

スライムの生息地から外れたこの場所にスライムがやってきた。その上、自ら人に近づいてくる。どう考えても、このスライムは普通とは違う。変なスライムなのだ。

一度森へ返したはずのスライムが、自らやってきた。それも、どうやって入ったのだろう。

今この家は、扉も窓も全て閉じているはずなのだ。入れるとすれば、ホームラが使っている出入り口か、その柔らかさを生かしてどこかの隙間から入ってきたのか……。

なんにせよ、偶然というわけではあるまい。

このスライムは意志を持っていると考えていいだろう。

私がアルトさんの横に並べば、スライムはピョコピョコ伸び上がるのをやめて、可愛らしくぷるんと揺れた。

なんだか、うるうるした瞳で見つめられているような錯覚を感じる。

変であつてもやはりスライムは可愛い。スライムの誘惑に負けないように、私は必死に耐える。そんな思いで、私とスライムが見つめ合っていると、突然、横から飛んできた毛玉がスライムの上に覆いかぶさった。

「こいつ、あの時のスライムですわ！」

飛んできた毛玉は、ミカンだった。

何故か威嚇しながら、スライムに覆いかぶさっている。遊んでいるのだろうか……？

ミカンがこんなことをするなんて珍しい。私は驚きで目を見開いた。

ところであの時って、どの時だろう……？

アルトさんも思ったことは同じだったようで、ミカンに問いかける。

「あの時って？」

「王都へ向かう旅の途中、チナがスライムに夢中になってしまったことがあったでしょう？ こいつは、その時のスライムですわ」

それはおそらく、私が人生で初めて出会ったスライムのことだろう。

あの時は初めてのスライムに興奮して、少々我を忘れてしまっていたことを覚えている。

みんなを引かせてしまうほどのあの感動は、忘れられるものではないだろう。

思えばあの時から、このスライムは少し特殊だったのかもしれない。

今まで特に疑問に感じたことはなかったが、そういえばこの子は、突然私の目の前に飛び出してきたのだ。